
冬空と恋心

yoshihira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬空と恋心

【Nコード】

N7718S

【作者名】

yoshihira

【あらすじ】

この想いを告げたら二度と戻れない。

今日、わたしは一つのお墓を作る。

行き場のないこの想いの為に。

兄のような人に恋をした女の子のお話。

今日、わたしは一つのお墓を作る。
行き場のないこの想いの為に。

ずっと好きだった夏兄にまた彼女が出来た。

藤堂家とは家が隣で、夏矢兄は十歳上の近所のお兄さんだった。
我が家の両親の不仲は有名で、小さな頃からわたしは一人ぼっち
でゴハンを食べる事が多かった。

そんな時、夏兄のお母さんである深雪さんが呼びに来てくれて、
夕食をよくごちそうになった。

夏兄は年が離れているにも関わらず、わたしとよく遊んでくれた。
ままごともしも付き合ってくれたし、毎年の誕生日も忘れずに祝って
くれた。

そんな夏兄にわたしが恋心を持つ事は必然だったと思う。

けれど、十も離れた年の差はいかんともしがたくて、夏兄にとっ
て所詮わたしは妹のような存在でしかないって事もよくわかってい
た。

身内の欲目抜きにもバスケットボール部で活躍する夏兄は格好よく、高校、大学と、たくさんの彼女が現れては去っていた。多分、夏兄は基本的に女の人には優しくない人だと思う。

彼女に飽きたら手酷く振っていると噂で聞くと、実際、夏兄は彼女の前では素っ気なくみえる。

わたしは彼女じゃないから優しくしてもらっているけれど。

中学を卒業した日の夜、わたしは庭でせつせとお墓を作っていた。まだ三月初めの外気は凍る程冷たいけれど、手袋を持っていなかったのも、そのままむき出しの手で何度も地面を掘っていく。

そこに手紙を置く。

未開封のままの白い封筒。

それから土をどんどんかけて、最後に小さな山が出来る。

放心したまま、それからどのくらいぼんやりしていただろう。

「ふゆ」

突然、名を呼ばれて、我に返る。

しかもよりによって、見つけられたのは夏兄で。

仕事帰りなのか、黒いコートから覗くスーツ姿が大人の男の人だ。って事を嫌という程感じさせた。

慣れた様子で我が家の庭に入ってくると、夏兄は立ち竦んでいる。わたしの隣にやって来た。

「こんな寒い中、泥遊びか？ 風邪引くぞ」

わたしに着せかける為だろう、コートを脱ごうとするのを、「もう家に入るから」とわたしは慌てて止めた。

終わりの見えない恋に終止符を打つ事を決めたのは自分だったけれど、そうすぐには気持ち切り替わらない。

複雑な感情が込み上げてきて、切なくなる。

もつと努力をすれば良かったかな。

わたしは告白すらしなくてこの恋を諦める事を決めた。

それは両親の不仲をずっと見続けてきた自分が人の想いを信じられなくなった所為でもあるのだけれど。

告白して受け入れられたとしても、きっといつか別れの時が来る。それくらいなら、今の兄と妹の関係を続けていた方がきっと。

「どうした、ぼうつとして。熱でもあるのか？」

夏兄はそう言って、無造作に額に手をあててくる。

「熱なんかないよ」

手を振り払うと、夏兄は眉をひそめた。

「こんな時間に何してたんだ？」

「お墓を作ってたの」

「・・・墓？」

「もうすぐお別れだから、この家とも」

中学の卒業と同時に、わたしはこの家を引っ越す事になった。

ついに両親が離婚を決め、わたしは高校から一人暮らしを始める事になっていた。

「この家で過ごす時もあとわずか。」

「夏兄や深雪さんとももうすぐお別れだね。」

自分で口にして、その事実は無性に悲しくなる。

地元の高校への進学を決めたから、距離的には今の家ともそう離れていない所に住むのだけれど、きつとその差は大きい。

会わなくなってしまうえば、きつと夏兄はわたしの事など忘れてしまっ。

「まだ寒いね。春は来るのかなあ。」

真夜中に近い今、吐く息は白くて、手の感覚も無くなってきた。

それでもまだ誰もいない家に入る気がしなくて、ぼうつと庭を見つめていると、いつの間に脱いだのか、夏兄がくるむようにコートをかぶせてきた。

「なつに。」

「家に入れ。」

強制送還される。

玄関でコートを返そうとしたら、「後で」と言われて、夏兄も一緒に家に入ってきた。

もしかしなくても、心配させてしまったんだろう。しまったと思う。

さつき帰ってきたばかりの夏兄は仕事で疲れてるのに、わたしの世話だなんて。

「あの、夏兄、心配しなくても大丈夫だよ！」

後は寝るだけだし。」

焦って必要以上に元気に振る舞うと、「いいからさっさと手を洗って来い」と言われる始末。

大人しく従い、居間に戻ると、勝手知ったる人の家で、夏兄はわたしの大好きな紅茶を入れてくれていた。

一口飲むと、体の中からぽかぽかと温まってくる。

こんな風に優しくされると本当は辛い。

泣きたくなくなってしまふ。

この恋を諦めきれなくなってしまふ。少しでも可能性が残されているんじゃないかって期待してしまふ。

その度にわたしは今日作ったお墓を思い出すだろう。

土の中に埋めた恋心を。

もう二度とよみがえらせないように。

「じゃあな」

玄関で夏兄は言った。

「うん、ありがとうね、夏兄」

さよなら、わたしの恋。

この想いを告げたら二度と戻れない事はわかっていたから。

今日、わたしは墓を作った。

(後書き)

一応、短編です。続きもありますが。
今は悲恋で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7718s/>

冬空と恋心

2011年5月13日09時02分発行